群馬地名だより

群馬地名研究会　会報

第１０７号
令和６年12月01日
（2024）
事務局

印　刷
モリタ印刷工業㈱

富士見村漆窪の、漆窪城と「宿原」の地名

～戦国期の城郭にみられる「宿」地名へのアプローチ～

須田　茂

一、はじめに

勢多郡富士見村漆窪（うるくぼ）に、漆窪城という戦国期の城郭跡がある。城の南西方の「榎畑（エノキハタ）」と「宿原（シクハラ）」という小字地に漆窪城の「市街・城下町」があったという伝承がある（以下、地名におけるカタカナのルビは「小字名調書」のものを示す）。ここで、漆窪城を中心に、「宿原」という地名に焦点をあてて小考を試みたい。なお、本稿では、市町村名は平成の合併前の形で示す。

二、漆窪地区の地形

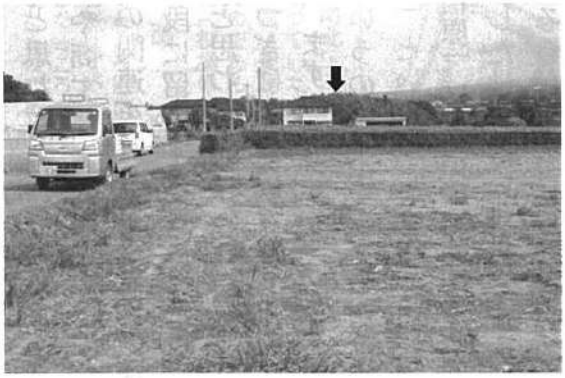
漆窪は、赤城山の南西側の裾野に位置している。赤城山は、周囲に広大な裾野を広げている。裾野には、山頂に向かって何本もの浸食谷が入っており、谷と谷の間は緩斜面の台地となっている。

漆窪は、標高２４０ｍ～３００ｍの地にあり、谷と台地が混じり、傾斜地や坂の多い地形環境にある。地区の中央部に中（なか）堀（ほり）川の谷、西端に西窪（にしくぼ）川の谷があり、中堀川の谷の東側と西側に丘陵性の台地がある。疆域は、南北２ｋｍ、東西８００ｍほどで、左手を伏せたような形を呈している。

三、漆窪城と長桂寺（ちょうけいじ）

漆窪城や長桂寺などの、城に関わる施設は、西側の台地面上に集まっている。この台地面は、幅３００ｍほどで、南北に細長く延びている。漆窪城は、この台地から南東にせり出す舌状台地状の地に立地する。城郭研究家の山崎一氏は、三つの郭からなる丘城であるとしている。城の所在地の小字を「上ノ城（ウヘノジョウ）」といい、城の南東麓に「城下（ジョウシタ）」という小字地がある。漆窪城は、南東部に追手虎口があるということから、「城下」は大手口にあたるであろうか。漆窪城は戦国期の中で終焉しており、その形状を良く留めているとみられる。城主は長尾大膳という。戦国期の関東域で大きな勢力を保持していた長尾氏という一族がいた。その主流は白井長尾氏や総社長尾氏であるが、大膳は長尾氏の一支族であった。

漆窪城の西方２００ｍほどに長桂寺という寺がある。宗派は曹洞宗である。長尾大膳が長享元年（１４８７）に創建したと伝えられている。『漆窪村誌』（明治１０年）に、「長



「榎畑」・「宿原」の小字地の景観（南から）

榎畑・宿原は、漆窪城の、家臣や商工業者の居住区と伝承されている地である。舗装路の奥手に「長桂寺」。

↓が漆窪城跡。寺の周辺の住宅地が「榎畑」。住宅地前方の畑地が「宿原」である。